

「ハートバッジ：障害への理解促す」の記事に接して

ある養護学校の PTA が、ハートバッジの配布活動に取り組んでいることを新聞報道で知った。

記事によると、「表に黄色と水色のハートマークを繋いだ図案」と「障がいがあります」との印字。

「裏には、学校名、子どもの名前、連絡先が記載」できるようになっているとか。

知的障害、発達障害（自閉症等）は一見して分からないので、「外出先で跳びはねたり、うなり声を上げるなどの行動を、威迫とか暴力行為の手前と誤解されることが少なくなく、警察沙汰になることもある」ので、バッジを見て「ああそうなのか」と知ってもらって「無用なトラブルを防ぎ、冷静な対応を願って」のこととかで、学齢児だけでなく「地域の障害のある多くの人に着けて欲しい」との願いもあるとか。

だが現実には、障害児・者と分かり、「かつあげ」されたり、からかわれ、つばを吐きかけられたというようなことも、報道等で耳にしている。

また、「障害」について授業で話している経験から、「どう声かけして接していいか、どう手助けすれば分からないので、町中で障害児・者を見ても、つい見て見ぬ振りをしてきた。」という若者が結構多い。

つまり、係わり方が分からないとバッジを見ても避けがちなのが、現代社会の一般的な反応でないだろうか。

目新しい活動を始めようとする、メリット、デメリットがあるもので、PTA が議論の末にメリットが多いと判断・実施したのだろうが、「障がいがあります」との印字には戸惑いを感じる。

障害児・者の「理解・支援の普及のため」であれば、米国の「脳に関連した病気、障害（精神障害・知的障害・発達障害・神経難病・認知症・高次脳機能障害など）を抱える人たちに対する社会からの偏見を払拭し、理解を広めることを目的」としたシルバーリボンキャンペーンのように、当事者を含め周りのみんなが、理解・支援の普及の願いを込めたシンボルデザインのバッジ配布活動が望ましいと思うのだが…。

参考までに、このハートバッジ配布活動について、ご意見をお聞かせ下さい。